

複合動詞「一切る」に関する統語論的分析

新沼 史和*

A Syntactic Analysis of the Compounds *-kiru* in Japanese

Fumikazu NIINUMA*

Abstract: It has been argued recently that the so-called lexical compounds that Kageyama (1993) proposes should be reexamined. In fact, many linguists including Nishiyama (1998), Hasegawa (1999) and Saito (2001) have argued that the lexical compounds should be formed in the syntactic component, not in the lexicon. In this paper, the compounds including *-kiru* in Japanese are examined, and the main claims here are 1) that there are three types of compounds including *-kiru* in Japanese, 2) that the three types of compounds come from the different syntactic structures. Finally, this paper presents a piece of evidence for the syntax of event structure (cf. Ramchand (2008)).

Key Words: Complex Predicates, Lexical Compounds, Event Structure

1. はじめに

日本語は、様々な述語 (predicates) が存在する。動詞、形容詞、形容動詞だけではなく、動詞を2つ組み合わせて作られる複合動詞や名詞と軽動詞を組み合わせて作る軽動詞構文などがある。影山 (1993) の詳細な分析以来、日本語の複合動詞の研究は、日本語の言語学の非常に興味深い分野の一つとなっている。影山の分類に従うと、日本語の複合動詞は、2種類に分けられる。一つは、語彙部門で作られる語彙的複合動詞、もう一つは、統語部門で作られる統語的複合動詞である。近年、語彙的複合動詞の再分析が行われている。Hasegawa (1999), Saito (2001), 藤田・松本 (2005), Zhang (2004, 2006) では、結果を表す複合動詞が語彙部門ではなく統語部門で形成されると論じている。もし、この分析が正しければ、語形成という語彙部門で行われると従来考えられてきた操作が不要であ

る、という帰結となる。実際、語彙部門での語形成が不要であるという議論が近年行われている (Borer (1994, 2000, 2005), Marantz (1997))。このような議論の中、日本語の複合動詞を再検討することは、非常に有意義であると思われる。

そこで、本論では、複合動詞「一切る」に注目し、複合動詞「一切る」の再分類を試みる。杉村 (2008) の分析に従い、複合動詞「一切る」を3つに分類し、それぞれの統語的特徴を見ていく。そして、その分類が事象構造の統語論にどのような示唆を与えることができるのかということを検証する。また、新沼 (2009) の様態を表す複合動詞に関する分析の妥当性についても論じる。

2. 先行研究

先行研究において、複合動詞「一切る」を大きく二つに分けて分類していることが一般的で

*高知市旭天神町292-26 高知学園短期大学・幼児保育学科・外国語研究室. Email: niinuma@kochi-gc.ac.jp.

ある。「噛み切る」「焼き切る」などのように、本動詞「切る」の「切断」の意味が保持されているものと、「走り切る」「困り切る」などのように、切断の意味が失われ、行為の終結や状態の限界を表すものがあることが指摘されている。

2.1. 先行動詞の特徴に基づく分類

森田（1989）は、「一切る」の意味を以下のよう
に4つに分類している。しかしながら、杉村
（2008）がしている通り、（1b-c）の区別が明確で
はない。例えば、「思い切る」は、完了を表わす
（1b）にも分類されているし、（1c）にも分類さ
れている。また、「押し切る」は、（1d）に分類
されているが、「押しながら切る」という意味に
も解釈されることから、森田の分類は十分では
ないことが窺える。しかしながら、森田（1989）
も「切る」の「切断」の意味が保持されている
場合とそうでない場合という2分類に準拠して
いると考えられる。

- （1） a. 先行動詞が、物を切る方法を表す動作動
詞の場合。
「掻き切る、噛み切る、食い切る、叩き
切る、断ち切る、突き切る、ねじ切る、
挽き切る、焼き切る」のように“切り離
す”行為そのものを表す。
- b. 「切る」が完了を表わす場合。
「打ち切る、思い切る、数え切る、
やり切る、読み切る、閉め切る、
売り切る、買い切る、貸し切る」
- c. これで完全だ、その行為を自信を持って
行うのだ、という強い言い方。
「言い切る、思い切る、踏み切る」
- d. 終了意識が、それ以上は進まないことを
表す場合。「非常に」「完全に」の意味を
添える。
「押し切る、困り切る、澄みきる、張り
切る、冷え切る」

姫野（1980）は、複合動詞の「一切る」を本
動詞の用法と補助動詞の用法と2種類あると論
じ、さらに、補助動詞の「一切る」を「完遂」

の意味と「極度」の2種類に分別するとしてい
る。

- （2） a. 本動詞の「きる」
掻ききる、かっきる、かみきる、
食いきる、ひききる
補助動詞の「きる」
- b. 「完遂」の意味
防ぎきる、生かしきる、
数えきる、売りきる、走りきる
- b. 補助動詞の「きる」
「極度」の意味
荒れきる、育ちきる、疲れきる、冷えき
る、当惑しきる

姫野（1999）では、本動詞「きる」の意味で
用いられている語彙的複合動詞と接辞的に用い
られる統語的複合動詞との2種類に分類してい
る。また、姫野（1980）に従い、後者をさらに
「行為が完遂することを表すもの」と「瞬間動詞
において極度の状態に達することを表すもの」
とに分けている。しかしながら、「割りきる」と
「諦めきる」が「終結」にも「極度」にも分類し
ていたりするなど、この分類も完全とは言えな
い。また、「焼ききる」が語彙的複合動詞に分類
されているが、統語的複合動詞としても機能す
る場合がある。

- （3） a. 太郎が鉄の棒を焼き切った。（切断）
- b. 太郎がここにあるすべての魚を焼き切っ
た。（完遂）

森田（1989）や姫野（1980, 1999）の分類は先
行動詞の特性によって分類する方法を採用し、
興味深い特徴を提示したが、（3）が示してい
ることは、動詞のみの特性だけで分類すること
は不十分であることを示唆していると思われる。
また、複合動詞の意味決定方法も不明である。
なぜこの動詞が「一切る」と結びついたらこの
意味に限定されてしまうのか、ということにつ
いて明確な理由付けが必要であると思われる。

2.2. 杉村（2008）の分析

杉村（2008）は、先行動詞の省略可能性に注目し、興味深い分類を提示している。次の例を考えていただきたい。

- (4) a. 彼は固い肉を(~~噛み~~)切った。
 b. 彼は彼女のことをきっぱりと(~~思~~)切った。
 c. *彼はマラソンで42.195キロを(~~走り~~)切った。
 d. *彼は過酷な労働により心身ともに(~~疲~~)切った。
 d. *彼は自分の意見をきっぱりと(~~言~~)切った。

(4a,b)は先行動詞を省略しても文が成り立つが、(4c-e)は成り立たない。このことより、杉村（2008）は、前者の場合には、「一切る」は本動詞の意味を保持し、後者の場合には、先行動詞の意味を強調する接辞化した表現である、と論じている。また、本動詞の「一切る」を細分化し、「切断」と「終結」の2種類の意味があるとしている。接辞化した「一切る」の場合には、先行動詞のアスペクトにより、「行為の完遂」、「変化の達成」、「極限状態」の3つに分類することができるとしている。以下が、杉村（2008）が提案している複合動詞「一切る」の意味分類である。

(5) 本動詞「切る」の持つ切断の意味が生きているもの

- a. 「切断」：前項動詞で表わされる手段によって対象を物理的に分断することを表す。
 噛み切る、食いきる、叩き切る、首を締め切る、枝を打ち切る
 b. 「終結」：前項動詞で表わされる行為によって事態の継続に区切りをつけることを表す。
 番組を打ち切る、申込みを締め切る、追跡を振り切る、才能を見切る

(6) 切断の意味があまり感じられず、接辞化したもの

- a. 「行為の完遂」：動作動詞に付いて、当該の事態を最後までやり残しなく完全に行うことを表す。
 走り切る、食べきる、使い切る、意見を押し切る、難局を乗り切る
 b. 「変化の達成」：変化動詞に付いて、当該の変化が最後まで滞りなく生じることを表す。
 諦め切る、治り切る、信じ切る、氷が溶け切る
 c. 「極限状態」：状態動詞に付いて、すでに成立している状態が質的にさらに深まってそれ以上は進まない限界に達していることを表す。
 疲れ切る、冷え切る、困り切る、濁り切る、澄み切る、頼り切る

この分類で興味深い点は、目的語が複合動詞「一切る」の分類に影響を与えるということである。例えば、「押し切る」は「切断」に分類されているが、「意見を押し切る」となると「行為の完遂」に入れられている。このことは、動詞のアスペクト的特徴のみでの分類では不十分であるということを明示しているものと考えられる。しかし、杉村（2008）の分類でも十分なものとは言えないところがある。第一に、森田（1989）、姫野（1980, 1999）と同じ問題であるが、分類方法の決定の理由付けが不明である。杉村（2008）は先行動詞アスペクトのみでは決定できないということを論じているが、では、具体的に何によって意味分類が決定できるのか、明らかではない。また、(3)では、「焼き切る」の例を挙げたが、「噛み切る」、「枝を打ち切る」でも「切断」ではなく、「行為の完遂」を表す場合がある。

- (7) a. 犬がロープを噛み切った。(切断)
 b. 太郎が今日買ったガムをすべて噛み切った。(行為の完遂)
 (8) a. 太郎が枝を打ち切った。(切断)
 b. 太郎が公園の木の枝をすべて打ち切った。

(行為の完遂)

最後に、意味分類として提示した杉村 (2008) の分析は妥当であると考えられるが、統語的な相違点は存在しないのかということが問題となる。例えば、(5a,b) の意味分類は妥当であると考えられるが、統語的な相違点は存在しないのか、また、(5) と (6) を分ける統語的特徴は存在しないのか、ということについて次節から考えていきたい。

3. 複合動詞「一切る」の再分類

3.1. 動詞複合語の分類とその統語構造

影山 (1993) は、日本語の動詞複合語は、以下のように大きく分けて4種類あると論じている。

- (9) a. 並列関係
- b. 様態・付帯状況
- c. 手段¹
- d. 統語的複合語

影山 (1993) によると、(9a-c) が語彙的複合語、(9d) が統語的複合語という分類が必要であるとしている。ここで興味深いのは (9a,b) と (9c) の分類である。影山 (1993) は、この違いは意味だけの違いではなく、V1,V2が表す事象の時間関係が異なる、ということを指摘している。つまり、並列関係、様態・付帯状況の場合、V1の事象とV2の事象が同時でなければならないという制約があり、手段を表す動詞複合語の場合は、V1の事象が初めに起こり、その結果としてV2の事象が引き起こされるということを論じている。

3.2. 杉村 (2008) の再分類

時間関係によって動詞複合語を分類すると、杉村 (2008) が分類したものは以下のように再分類することが可能である。

- (10) a. V1の時間とV2の時間が同一なもの「切断」
- b. V1の行為によってV2が引き起こされる

もの 「終結」

- c. 統語的複合語 「行為の完遂」、「変化の達成」、「極限状態」

(10a,b) の分類については、次節で検証するので、ここでは、統語的複合動詞に分類した「行為の完遂」、「変化の達成」そして「極限状態」について考えてみよう。この3つの意味は「切る」という意味によって分類されたものではなく、前項動詞のアスペクトによって分類されたものであるので、杉村 (2008) に従い、1つにまとめるのが妥当であると思われる。杉村 (2008) は、この場合の「一切る」は、「切断の意味があまり感じられず、接辞化したもの」と論じているが、実際には、「完全に (すっかり、100パーセント) ~する」という「完遂」の意味があるものと思われる。そこで、この「一切る」の用法を詳細に検討してみると、以下のように前項動詞に受身や使役の形態素が付与されている場合が存在する。また、(13) のように、前項動詞に尊敬の形態素が付与しても容認性はかなり高い。

- (11) a. 最初から決められ切った計画
- b. 追い詰められ切ったところで、助っ人が現れた。
- c. 絞られ切ったレモンを捨てた
- d. 実力がありながら忘れられ切った作曲家
- e. さんざん釣られ切った後では釣っても仕方がない。
- (12) a. あのコーチは選手たちを最後まで辛抱させ切った。
- b. あの会社はユーザーを新バージョンへとどんどん移行させ切った。
- c. 瞑想をして神経を集中させ切った

¹ 由本 (2005) では、さらに因果関係という分類が必要であると論じている。この因果関係という意味を考えると、手段と同様、V1の事象が引き金となり、V2の事象が起こるという、手段と同一のパターンを示す。

- (13) a. 先生は大作をお書きになり切った。
 b. 先生は体調がすぐれなかったが、最後までお話しになり切った。

- f. 突っ切る
 g. 押し切る
 h. 挽き切る

このように前項動詞に受身などの形態素が付与することができるということは、まさに影山（1993）の統語的複合語に当たる。いずれの場合も「切断」の意味や「終結」の意味は存在せず、「完遂」の意味だけであるので、それらとは区別することが重要であると思われる。

次節から、「切断」と「終結」の「一切る」における統合的特徴について詳細に考察していく。

3.3. 「切断」について

3.3.1. 同時性

それでは、「切断」の意味の「一切る」を使った動詞複合語の統語的特徴を考察してみよう。まず、「焼き切る」の場合を考えてみよう。

- (14) a. 太郎はガスバーナーで鉄板を焼き切った。
 b. 医者がレーザーでがん細胞を焼き切った。

(14a) の場合、「太郎がガスバーナーで鉄板を焼く」という事象をしながら、「太郎がガスバーナーで鉄板を切る」という事象が起こると考えられる。言い換えると、「焼く」という事象と「切る」という事象は同時に起こることである。従って、この複合動詞は、影山（1993）の並列関係・様態の複合動詞に分類されるものと考えられる。(14b) についても同様の考察が可能である。

3.3.2. 前項動詞の特徴

次に、「切断」を表す複合動詞「一切る」を見てみよう。

- (15) a. 焼き切る
 b. 搔き切る
 c. 食い切る
 d. 叩き切る
 e. 断ち切る

これらの複合動詞の前項動詞に注目してみると、いずれも活動動詞である。言い換えると、主語には動作主が現れることを要求し、同時に、それぞれの動詞の結果への含意が必要とされない。また、いずれの前項動詞も、「切る」という事象を修飾するような動詞であるということがわかる。従って、以下のような複合動詞では、前項動詞が活動動詞ではないので、「切断」の意味にはならない。

- (16) a. 締め切る
 b. 描き切る
 c. 読み切る
 d. 思い切る

3.3.3. 副詞との共起制限

由本（2005）が論じている通り、並列関係を表す複合動詞の場合、副詞は前項動詞と後項動詞を同時に修飾する。従って、(22) に示す通り、副詞は前項動詞と後項動詞を両方修飾できるものが表れる。

- (17) a. 医者がレーザーでがん細胞を完璧に焼き切った。
 b. 医者がレーザーでがん細胞を完璧に焼いた。
 c. 医者がレーザーでがん細胞を完璧に切った。

しかしながら、そうとは限らない例も存在する。以下の例を参照されたい。

- (18) a. 太郎は10杯のどんぶり飯をがつつ食った。
 b. 太郎は10杯のどんぶり飯をがつつ食い切った。

- (19) a. 小説では、主人公は自分の首をきつく締

めたらしい。

- b. *小説では、主人公は自分の首をきつく締め切ったらしい。

(23) と (24) で興味深いのは、前項動詞を修飾できるはずの副詞が、「一切る」と一緒になって複合動詞になったら、その複合動詞と共起することができないということである。

3.4. 「終結」について

3.4.1. 非同時性

それでは、「終結」をあらわす「一切る」を用いた複合動詞における、前項動詞の表す事象と後項動詞の表す事象との時間関係を見ていくことにしよう。

- (20) a. 太郎は彼女の才能を見切った。
b. ジョンは花子の追跡を振り切った。
c. 10年続いた番組を突然打ち切った。
d. 学会は応募の申し込みを締め切った。

「番組を打ち切る」を例にして考えてみると、この事象が表していることは、最初に「番組を打つ（始める）」という事象が存在し、その後、「番組を切る（終わらせる）」という事象が引き起こされると考えることができる。つまり、番組を始める事象と番組を終了させるという事象が同時に起こることができないわけである。このことが示していることは、「終結」を表す複合動詞の時間関係は、「切断」を表す時間関係とは異なるものであるということである。

3.4.2. 前項動詞の特徴について

(20) で見たように、「終結」を表す複合動詞に表れる動詞は、「見る」「振る」「打つ」「締める」などのような動詞であり、いずれの動詞も「切断」という事象を修飾できるような活動を表していない。また、「振る」や「締める」は、achievement動詞である。従って、「終結」を表す複合動詞の前項動詞は、活動動詞だけではなく、様々なタイプの動詞が表れるということがわかる。

3.4.3. 副詞との共起制限

次に、前項動詞のみを修飾する副詞が複合動詞「一切る」と共起できるか検証してみよう。以下に示す通り、容認度は少し落ちると思われるが、それでも容認できると思われる。

- (21) a. ?ジョンは花子の追跡をあっさり振った。
b. ジョンは花子の追跡をあっさり振り切った。
(22) a. 太郎は花子の才能をじっくりと見た。
b. ?太郎は花子の才能をじっくりと見切った。

このことから、「終結」を表す複合動詞と「切断」を表す複合動詞は明らかに異なる分析が必要であると思われる。

3.4.4. あいまいな複合動詞について

ここで非常に興味深いのが、「打ち切る」と「締め切る」である。なぜなら、「打ち切る」は「切断」の意味だけではなく「終結」の意味もあるからである。以下の例を考えてみよう。

- (23) a. 太郎はハンマーで鉄板を打ち切った。
b. 10年続いた番組を突然打ち切った。
(24) a. 小説では、主人公は自分の首を締め切ったらしい。
b. 学会は応募の申し込みを締め切った。

ここで重要なことは、前項動詞「打つ」の意味の相違である。「切断」の意味で表れる前項動詞の意味は「物を他の物に向けて強く当てる」であり、「終結」の意味で表れる前項動詞「打つ」は、「興行・方策・施策をする」という意味であり、「物を他の物に向けて強く当てる」という意味ではない。同様に、「切断」の意味で表れる「締める」は、「強く引っ張ったりねじったりする」という意味である。それに対して、「終結」の場合に表れる「締める」は、「その時点で打ち切る」という意味である。この例が示唆していることは、複合動詞に表れる後項動詞「切る」の意味は、本来決まっているものではなく、前項動詞

によって「切断」か「終結」かが決定されるということである。具体的に言い換えると、「切断」の「切る」も、「終結」の「切る」も、動詞アスペクトである、achievementは変化することがないと思われる。そして、前項動詞の特性によって「切る」の語彙的な意味が決定されることができる。そのような点において、「切断」の意味と「終結」の意味は、動詞アスペクトの観点から考えると同一なのである。

3.5. まとめ

以上みてきたように、複合動詞「一切る」は、影山 (1993) のいうところの語彙的複合動詞である「切断」、「終結」という2種類、そして統語的複合動詞1種類の合計3つのカテゴリーに分類できるということが明らかになった。また、前項動詞の特徴、そして副詞との共起制限より、「切断」と「終結」の複合動詞の特徴はそれぞれ異なることが判明した。次節では、これらの違いが異なる統語構造から導かれるということを論じる。

4. 分析

4.1. 事象構造の統語論

近年、語彙意味論等で論じられていた事象構造を統語構造で捉えようという動きが出ている。例えば、Hale and Keyser (1993, 2002) において導入された *v* という機能範疇は、外項にAgentの主題役割を付与すると考えられているが、この機能範疇が語彙意味論でいうところのACT関数に相当する。

- (25) a. [X ACT Y]
b. [_{VP} X v [_{VP} V Y]]

また、Ritter and Rosen (1998, 2000), Travis (1994, 2000, 2006), Thompson (2006) などでは、telicityを表すresult stateの事象構造が統語上に存在する、ということを論じている。つまり、telicityは語彙意味論が規定するものではなく、より大きな統語構造を考慮にいれなければならないということを示している。アスペ

クトが動詞のみで決定されるものではないということが日本語だけでなく英語でも論じられている。次の例を参照してみよう。

- (26) a. John ate an apple in an hour/*for an hour
b. John ate apples for an hour/*in an hour
(27) a. John walked for an hour/*in an hour
b. John walked to the store in an hour/*for an hour

(26) と (27) で示していることは、目的語や前置詞句がtelicityに影響を与えているということである。もちろん、動詞によってtelicityが決定される場合も存在するが(例えば、breakは常にtelicである)、動詞のみを見てtelicityを決定することへの警鐘を鳴らしていると言える。

そこで、私は、事象構造の統語論的分析を採用する。特に私は、Ritter and Rosen (1998, 2000), Travis (1994, 2000), Ramchand (2008) などにおいて想定されている、Resultを表す事象が動詞句の一番下に現れるという構造を仮定する。本論文で想定されている動詞句構造は以下のとおりである。

- (28) [_{VP} [_{VP} [_{VP} (Result)]]]

(28) において、SpecvPにある名詞句は、Agent、SpecVPにあるものは、undergoer、SpecVP (Result) のものはthemeという意味役割が付与される。この3つに分類された構造はRamchand (2008) とほぼ同一のものと思われる。Ramchand (2008) では、Init (iator), Proc (ess), Res (ult) という3つの独立した主要部を想定していたが、ここではそのような意味に依存した主要部を想定しないこととする。しかし、Ramchand (2008) と共通していることは、この最大投射の順序が事象構造の時間の流れに沿っているということである。従って、この (28) において、vPにおいて行われた事象

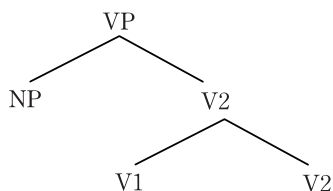
によりVPの事象が引き起こされ、そしてVP (Result) の結果が出てきたということを表すものである (詳細は Ramchand (2008) を参照のこと)。

この分析の利点の一つは、動詞の4分類を正確に捉えることができるということである。具体的には、Vendler (1967) 以来、動詞は活動・状態・達成・到達の4つに分類される。この事象構造の統語論で捉えることができるのは、活動動詞と達成・到達動詞の違いである。一般的に、活動動詞は、終点を含意することが無い。それに対して、達成・到達動詞は終点を含意する。例えば、John ranは、終点を表すことがなく、表したいのであれば、John ran to the park とするしかない。それに対して、The ship sank といえば、「沈んだ」という終点を含意する。この違いを説明するために、活動動詞では終点を表すResPがない、逆に達成・到達動詞はResPがあるということである。

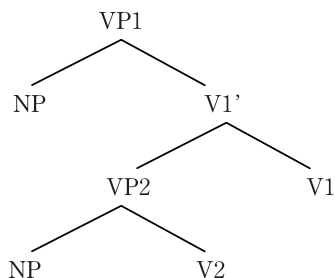
4.2. 提案

事象構造の統語論を仮定しつつ、本論では、それぞれの動詞の表わす事象の時間関係を捉えるために、以下のような統語構造を提案したい。

- (29) a. 「切断」を表す場合、V1とV2が併合され、一つの大きな動詞を形成する。



- b. 「終結」を表す場合、VP2がVP1に埋め込まれた構造になっている。



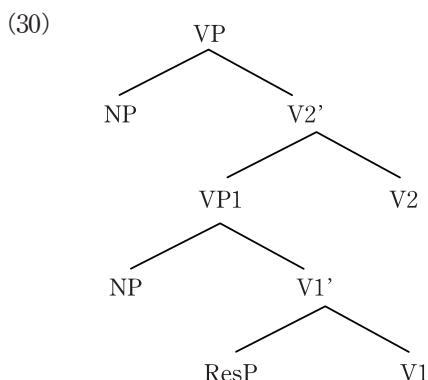
(29a) は、Niinuma (2009) の様態を表す複合動詞の分析に従い、「切断」の場合、V1、あるいはV2が動詞句を形成せず、いわば動詞の付加詞のようになっていると仮定する。また、(29b) においては、Hasegawa (1999) に従い、V1、V2ともに動詞句を形成し、時間関係を捉えるために、埋め込みの構造を仮定している。Hasegawa (1999) と異なるところは、Hasegawa (1999) は、R (esult) という意味に密接した主要部を仮定しているが、本分析ではそのような主要部を仮定しないということである。

この分類が正しければ、第一に複合動詞が表す事象の時間関係を正確に捉えることができる。まず、「切断」の場合、2つの動詞が併合されているということで、2つの動詞の時間関係が同じであるということが保証されている。また、「終結」の場合、一つの動詞句がもう一つの動詞句に埋め込まれている構造である。従って、VP1で表される事象が最初に起こり、次にVP2で表される事象が引き起こされるということである。

さらに、この構造は、副詞との共起制限も説明可能である。Koizumi (1995) は、副詞などの付加詞は最大投射に付加される、と論じている。もしこれが事実であるならば、「切断」において本来、前項動詞を修飾できる副詞が複合動詞になった場合に表れることができないということをやうまく説明できる。また、「終結」の場合にそのような制限がないということは、言い換えると前項動詞が最大投射を持っているということになり、上に提示した構造が妥当であるということを示している。

さらに、前項動詞の特徴をも正確に捉える事が出来る。「切断」を表す複合動詞と共起できる動詞は、活動動詞だけであった。また、「終結」を表す複合動詞と共起できる前項動詞にはそのような制限がなかった。ここで問題は、なぜ「切断」を表す複合動詞の前項動詞に到達・達成動詞が表れることが不可能なのか、ということである。前節で到達・達成動詞の動詞句構造を見ると、ResPというものが存在する、ということ概観した。これに従うと、到達・達成動詞は、動詞のみで終点を含意するのではなく、別の最

大投射を持つことによって終点を含意するということになる。従って、もし「切断」の統語構造と到達・達成動詞を併合しようとする、以下のようになる。



(30) を見て明らかなように、この構造は、「終結」の統語構造である。ゆえに、「切断」を表す複合動詞の前項に到達・達成動詞が入ることができないのである。

5. まとめ

本研究において、影山（1993）の分類方法を用いて、複合動詞「切る」の新しい分類法を提示した。要約すると、以下のとおりである。

- (31) a. 統語的複合動詞： 完遂の意味を表す。
語彙的複合動詞
- b. 1. 「切断」： 切断を行うことができる活動動詞と共起する。
2. 「終結」： 切断を行うことができない動詞と共起する。

また、語彙的複合動詞を統語的に考察することにより、「切断」、「終結」という2つに下位分類されるということがわかった。そして、語彙的複合動詞を統語的に分析し、二つの語彙的複合動詞の統語構造が異なるということを論じ、この分析が事象構造の統語論の妥当性を示す証拠の一つになるということを議論した。

本論で行った分析が正しければ、影山（1993）が論じている、語彙的複合動詞が語彙部門で形

成されるという主張が妥当でないということになる。従って、語彙的複合動詞を統語的に再分析することにより、新たな知見が得られるのではないと思われる。

引用文献 (References)

- Borer, Hagit. 1994. The Projection of Arguments. In E. Benedicto and J. Runner (eds.), *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics Functional Projections* 17: 19-47.
- Borer, Hagit. 2005. *The Normal Course of Events*. Oxford: Oxford University Press.
- 藤田耕司・松本マサミ 2005. 語彙範疇（1）動詞. 東京：研究社
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations. In Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*. 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser. 2002. *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko. 1998. The Syntax of Resultatives. In Kazuko Inoue (ed.), *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language: Explanation of the Human Faculty for Constructing and Computing Sentences on the Basis of Lexical Conceptual Features*, COE Research Report 2, 31-57. Kanda University of International Studies.
- 姫野昌子 1999. 複動詞の構造と意味用法. 東京：ひつじ書房
- 何 志明 2002. 様態・付帯状況の複動詞の組み合わせ. 日本語と日本文学 35: 31-48.
- 影山太郎 1993. 文法と語形成. 東京：ひつじ書房
- Koizumi, Masatoshi. 1995. *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation,

- MIT.
- Niinuma, Fumikazu. **2009**. The syntax of delimited events: evidence from manner V-V compounds in Japanese. *Proceedings of SIOGG 11*, 291-305.
- Nishiyama, Kunio. **1998**. V-V Compounds as Serialization. *Journal of East Asian Linguistics* 7: 175-217.
- Ramchand, Gillian. **2008**. *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*. Cambridge University Press.
- Ritter, Elisabeth and Rosen, Sara Thomas. **1998**. Delimiting Events in Syntax. In Miriam Butt and Wilhelm Geuder, (eds.), *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 135-164, Stanford, CA: CSLI Publications.
- Ritter, Elisabeth and Rosen, Sara Thomas. **2000**. Event Structure and Ergativity. In Carol Tenny and James Pustejovsky (eds.), *Events as Grammatical Objects: The Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, 187-238. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Saito, Mamoru. **2001**. Movement and θ -roles: A Case Study with Resultatives. In Yukio Otsu (ed.), *Proceedings of the Second Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 35-60, Tokyo: Hituzi Syobo.
- Thompson, Ellen. **2006**. The structure of bounded events. *Linguistic Inquiry* 37, 211-228.
- Travis, Lisa. **2000**. Event Structure in Syntax. In Carol Tenny and James Pustejovsky (eds.), *Events as Grammatical Objects: The Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, 145-185, Stanford, CA: CSLI Publications.
- Travis, Lisa. **2006**. *Inner Aspect: The Articulation of VP*. Ms. McGill University.
- Vendler, Zeno. **1967**. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 由本陽子 **2005**. 複合動詞、派生動詞の意味と統語. 東京：ひつじ書房
- Zhang, Chao. **2004**. Japanese V-V Compounds Revisited: an Analysis Based on the VP Shell Structure. *Proceedings of the 6th Seoul International Conference on Generative Grammar*, 299-315.
- 超 張 **2006**. 中国語との比較に基づく日本語の複合動詞の研究. 広島大学 博士論文.